『経済研究』（明治学院大学）第125号　2002年

【書　評】

Geoffrey Layman, The Great Divide. Religious and Cultural Conflict in American Party Politics. 2001.

中　山　弘　正

評者は，1998年度から経済学科に選択（卒業）科目として設定された2単位もの「キリスト教と経済」を，4年間（8回）講義した。資本主義の発生期についてのウェーバー＝大塚テーゼをめぐる問題，資本主義批判のマルクス理論とキリスト教との関係，などと並べて，講義では，現在のグローバル化の震源地・アメリカについてもふれるようにしてきた。そこでは，キリスト教と経済，どころではない。キリスト教は大前提で，その中の「リベラル」か，「ファンダメンタル」かが政治経済の政策を争い，権力を競う状況である，と講じてきた。現代では，リベラルが民主党，ファンダメンタルが共和党，という結びつきが相当に強いことを示してきた。ファンダメンタルなキリスト教の動きとレーガン[1]，ブッシュ（父子）の政権との深い関係はもっとも見易いところであろう。

2001年のあの「9.11」は，アメリカの中のキリスト教の2つの流れを一時全く合流させたかとさえ見えたが，「アフガン空爆」路線が余りにも素早く打出されたことには，ファンダメンタル＝ブッシュ，の構図が鮮明に反映していたといわねばなるまい。

とはいえ，ファンダメンタル＝共和党，リベラル＝民主党という図式はやはり何といっても粗雑な概観にすぎないわけであり，現実のアメリカの政治構造は階層・地域・職種等々にきわめて複雑に関係していることは論を俟たない。

本書，『大いなる分裂』のサブタイトルは，「アメリカの政党政治における宗教的・文化的闘争」であり，いわば，先の粗雑な図式の内側の複雑な構造に迫り，解明しようとするものであることが示されている。

8章より構成される。「党システムにおける宗教的・文化的変化の説明」「宗教と宗教に基づく政治闘争の概念化」「党活動家の間での宗教的文化的変化」「内的・外的分裂：政党内・間の宗教的・文化的闘争」「党員大衆の宗教的相貌の変化」「鎖の一環：党支持者の宗教的文化的変化の構造・結果」「分裂の調査：いかにまたいつ，宗教は現代の政治行動に関係するか」「宗教の争いとアメリカ政党政治：本性，含意，その相関関係の将来」。

目次を見ただけでも，党活動家と一般党員，そして選挙時の党支持者，と「党」関係者だけでも少なくとも3階層に分けて把握されていることがわかるであろう。

例えば，党派以前に，所得階層の，高中低で，

「聖書観」に統計的に有意な差異のあることが示されている。すなわち，聖書は①「神の言葉ではない」②「神の言葉だが，一語一語ではない」③「全部神の言葉である」と3つの見方に分けると，高所得者層では，1996年選挙時，②が57.9%，③は24.2%，中所得層では，②49.2%，③37.0%，低所得層では②41.1%，③45.9%と，低所得階層ほど聖書を「全部神の言葉」として受け容れる傾向が強い，すなわち，ファンダメンタルな傾向が強いことが示されている（p.35）。堕胎に関しても，高所得層では賛成が多く（48.5%），下層で反対が多い。

また例えば，1972年，民主党はヴェトナム戦争に反対のジョージ・マクガバンを大統領候補に指名したが，彼は反戦ムードの文化的リベラルな学生たちの間で人気が高く，その影響などで民主党が世俗化・文化的リベラル化の度合いを強めた結果，宗教的保守派にとっては共和党の方が魅力的になったりした。それまで民主党系で「福音的プロテスタント」（つまり，ファンダメンタル）であった者も，共和党の方に流れたと見られるのである（p.43）。もともとは，「福音主義者は非政治的傾向が強かった」のである。〔第1章〕

「宗教の概念化」で展開されているのは，文字どおり聖書に記述されている「地獄」の存在を信じるかどうか，とか，「悪魔」が現実に存在するか，といったこと（これらを信じるのがファンダメンタルあるいは，エヴァンジェリカル）が政治意識形成にどう関係していくかを追求していく。著者は，これは，聖書を頻繁に読んでいる者とそうでない者でも大きく分れるとし（p.63），また教会や祈り会への参加頻度も差異を生じていると分析する。そして，いろいろの調査を定量分析するために，世俗＝0，ユダヤ人＝1，リベラル・プロテスタント，リベラル・非伝統＝2，カトリック＝3，中庸プロテスタント＝4，黒人プロテスタント，保守的・非伝統＝5，新福音主義＝6，ファンダメンタリスト，カリスマ＝7といった数を仮定し，道徳観，文化的態度をいろいろと数量化して比較する，といった試みを行っている（p.83-87）。〔第2章〕

「党活動家」は主として代議員になっている人々を指しているが，例えば，共和党レーガンは，反ソ連とともに，新福音主義の政治運動にのって，伝統的道徳の強調，堕胎や人種・性同権の見直し，公立学校での祈禱，ホモの権利等で強い保守的立場をとったのであるが（p.101），全代議員中での福音主義的共和党代議士は，1970年代の6%ぐらいから，1980年代には増加し，9%強ぐらいにもなったことや，逆に，民主党内の「世俗」派も，80年代には概して増えたこと（p.102）すなわち，両党の分岐が加速したことなどがグラフ化されている。1972→92の6回の選挙を第2章のような計量分類にさらに教会出席・聖書を読むことでのレギュラー派とノン・レギュラー派に分けて分析し，例えば，共和党代議士では，この間，「レギュラー・福音派」が，6%から12%台へ（ノン・レギュラーは4-4.5%位），「レギュラー・カトリック」も，10%から13-15%ほどに増加し，逆に「ノン・レギュラー主流」は，34-35%から20%へと減少していたことなどが表示されていて興味深い。それでも，両党ともに「福音派」を自認する代議士はいるのであるが，それは，1996年選挙では，民主党では13%，共和党で31%と差があった（p.109）。やはり，ファンダメンタルは共和党により強く連っているのである。〔第3章〕

それぞれの党が沢山の内部グループを抱えている。例えば共和党でも，堕胎・家族問題にこだわるグループとキャピタルゲイン税〔例えば，株そのものを売ったときの税〕にこだわるグループに

分れていたともいえる（p. 133）。民主党内でも世俗化の程度で大きく差があり，また，アマチュアとプロフェッショナルつまり，純情派と実際派の差異も大きい（p. 134）。著者は上掲7点分類のそれぞれについて，さらに選挙へのコミットメントの度合いを，高中低と3分し，1992, 1988の選挙でどの候補の場合どうだったか，といったことまで計量・図示を試みたりしている（p. 138-139）。或いは，両党の7点分類グループごとに，1992年の大統領選挙で，関係者が，「党」か「人」か「論争点」かのどれで動いていたのか，といった整理も試みているが，両党とも，「論争点」よりは「人」への支持が大きく，「党」がその中間といったところであったことが明らかにされる（p. 147）。また，1972→92の6回の選挙で，7点分類グループごとに，例えば，堕胎に対する賛否の度合いがどう変化したか，といったこともグラフ化されており，例えば，両党とも「レギュラー・カトリック」集団で反対の度合いがもっとも強いが，その中でも「民主党」では反対者の比率が下っていること〔レギュラー・福音派でも同様〕を明らかにしている（p. 155）。だが著者は，「宗教がらみの文化争点」の政治的重要度は減ってきている，と考えている（p. 163）。〔第4章〕

1960→1996年とやや長期のスパンで，福音派の規則的教会出席者〔レギュラー・エヴァンジェリカル〕をとると，党関係者としては，民主党が50-60%から20%強ぐらいまで傾向的に下り，共和党が逆に20-30%から50%ほどにも上ってきたこと，交点が1984-86年頃〔レーガン大統領のとき〕であったことが明瞭に示されている（p. 171）。変化がこれほど判然としたのはこのグループだけで，あとは，例えば「規則的教会出席の黒人プロテスタント」では，民主党が70-80%以上で一貫し，共和党は10%以下という状況が35年間も変っていない（p. 174）。「規則的出席の福音派」の中では，老年と青年も比較されているが，共和党の中では「南部青年」が1980年代から急成長していたことも示される（p. 182）。1960年代と70年代に民主党系だったものが，1980-90年代に次第に共和党になり，宗教的視野から見て，今や共和党の強力なグループになった，というのが一番顕著なこの間の変化である，と見る（p. 199）。〔第5章〕

次に著者が研究するリンクとは，エリートレベル（大統領候補ら有名議員）の文化上の問題が大衆レベルの宗教的文化などとどう関連し合っていくか，といったことである。この中間に，党活動家の宗教的活動が入る，この3者の相関，といったようなことである。これらを，何とかして計量化して示そうと努力しているので（p. 219-222）少しわかりにくいところもあるが，時とともに，両党の対立性とか党の差異認識が強まってきたと見られている。「党関係者」といっても，投票，代議士，投票の勧誘，政治集会への参加，スティッカーを車に貼る，寄附，等々いろいろな関係の形があり，ここで「活動家」とはそれらの半分以上をなす人々と定義されている。「福音主義的共和党主義」とでもいったものが形成されてきている（p. 229）。これらは，1978-84年頃の「Moral Majority　その他の初期のクリスチャン右翼組織」や，1990-96年頃のChristian Coalition形成などが背景にあった（p. 235）。エリートと活動家の変化がこれらをもたらしてきた，と結論している（p. 237）。〔第6章〕

論争点としては，「経済問題」が何といっても一番の政治課題であり続けたのであり，投票者の過半は，1972→96年選挙でもそれを第1としてきた。しかし，80年代にはその割合は減り，「社会福祉」問題がかなり急に焦点化し，96年選挙

では，この2者はほぼ肩を並べた。それとともに，1980年以降，「モラルと文化」課題が徐々に論争点としての性格を強めた，と分析する（p. 248）。「宗教的伝統主義」を，著者は「宗教的伝統」そのものと区別して論じるが（p. 260），カトリックの変化とかプロテスタントの変化との相関などに於いて調べられる。〔第7章〕

最終章の展開の中で，1960→96年のアメリカ人の全般的な宗教事情の一端が出てきて興味深い（p. 312）。例えば，「教会出席」が「規則的」が40％弱だが最大かつ安定的で「しばしば」（ここではoften）は17-18％から少し下り，また少し上がって14-15％，しかし「全く出席せず」が，10％前後から増大し，90年代は30％前後（「ときどき」は30％前後から90年代20％前後に）で，変化としては最も目立っている，やはりアメリカ全体での「世俗化」は急進しているのであろう。じじつ，「プロテスタント主流」は，この間40％から20％に落ち，「Secular」が数％から10数％へと増加しているのである（福音的プロテスタントとカトリックが20数％で，ずっと競っている）（p. 312）。所得・宗教，教育水準・宗教の相関では，例えば，いずれでも「高・高」が1980→96年に「共和党」支持，「低・低」がどちらかというと「民主党」である（p. 314）。とされ，宗教・文化争点が，新世紀のアメリカ政治の特徴点となっていくだろう，と予想している（p. 341）。〔p. 345-435は，ほとんど全部データ，データ処理，文献等々である〕

かいつまんで内容を紹介したが，キリスト教でも民主党，共和党でどう異なるのか，といった問題も，決して固定的なものではなく，この数10年間にも相当変化してきたこと，その際，文化・宗教的争点がひとつの大きな事柄であったことや，またそれが，党関係者の種々のグループ間のあり方とどう関連していたのか，など，じつに複雑な構造をたんねんに分析していることがおわかりいただけたかと思う。

しかも，本書の特徴のひとつは，こうした分類や相関関係を計量的に分析してみせたことであろう。

プロテスタントでも「主流」「福音派」，それらも「規則的に」教会生活を守り聖書を日々読んでいる者とそうでないもの，さらにこの「福音派」と同じ位も存在するカトリック，それらもレギュラーとノンレギュラー，またユダヤ教徒，黒人等々と，なかなか複雑な宗教者構造を，ときには教育・所得水準との相関において，時には，民主，共和両党の党とのかかわりの強弱との相関において，解明してみせた本書は，今日のアメリカの政治・経済を宗教との関係でも論じようとするときに，必読のものといえるのではなかろうか。「ファンダメンタルキリスト教」の成長とともに「世俗性の増大」もひしひしと感じられるアメリカ。どちらの側面を見ても「問題」を感じてしまうのは評者だけであろうか。

註

（1） 森孝一「アメリカにおける国家と宗教」大西晴樹氏ら『近代ヨーロッパの探求③　教会』ミネルヴァ書房，2000.5. 第3章。

（Columbia UP, NY. 2001）

AD 2002. 8. 24.

（2002年9月27日経済学会受理）